

第26回 令和7年5月22日（木）

「アイヒマン実験についての考察」

「ナチスのホロコースト（ユダヤ人の虐殺）は有名な事件です。その首謀者だったアイヒマンは戦後逃亡しましたが、数年後に捕まりました。市民は極悪人を想像していたのですがあまりに普通の男性だったので驚いたそうです。ここから何が学べるのでしょうか？」

あれだけの虐殺をしながら、アイヒマンはまったく悪気がありませんでした。「私はナチス政府の指示を実行しただけです。」と答えます。アイヒマンは政府に忠実な役人でした。

「アイヒマン実験」という有名な心理学の実験があります。被験者と実験者がいます。実は被験者は演技をしているサクラなのですが、被験者が質問的回答に失敗するごとに電流を流されます。電流は次第に高くなり、最高では絶命の危険があります。（実際には電流は流れていません）

実験者には「私が責任を取るから失敗したら10%ずつ電流を上げてくれ」といいます。被験者に質問をして、答えを間違うたびに実験者によって電流が流され、どんどん上げられます。

実際は演技なのですが、電流が上がるにつれて被験者は悲鳴を上げ、やがて気絶したように反応しなくなります。もしかしたら命を落としているかもしれません。さて自分に責任がないと考えた実験者は平均でどれくらいまで電流を上げたでしょうか。

答えはほぼ全員が最後まで電流を上げ続けました。責任は自分にないと思うと人間は深く考えることをしなくなります。

これが「アイヒマン実験」で、分業制で自分に責任がないと思うと人間は罪悪感が減少します。現代の「特殊詐欺」もまさにこれだと思います。高齢者をだましてお金を奪う行為は卑劣でも、一人ひとりの罪の意識はとても低くなります。自分はただ電話をしているだけだという言い分です。

会社ぐるみの犯罪などもこの心理が働いています。本当に恐ろしいことです。トップからの指示待ちの組織におきやすく、上司に逆らえないような管理的な組織ほど陥りやすいと言われています。（ちょっと前に中古車販売の会社でも同じような事件がありました。）

この話の教訓は誰か一人が「これはまずいのではないか」と声をあげると一斉に「我にかえる」傾向が強いということです。これが内部告発制度につながっているわけです。

風通しをよくして、一人ひとりが指示待ちではなく考えて仕事をする。そして社会的に間違っているときに声をあげられる組織作りがとても大切だと私は考えています。